

知識をどう利用していくかを考えて見ます。

思考はコマンドを基盤にして、実現されていきます。コマンドとは、次のように表現されます。

(動詞[格,名詞・属性詞]・・・)

コマンドは動詞が中心の機能実現を表現しています。だから、まずは、動詞のイメージを持って、コマンドは接地されます。「歩く」という動詞には、「人が歩く」、「犬が歩く」、「猫が歩く」などの動作イメージの内の一つを代表させて、接地します。

その前提の下、名詞や属性詞が格情報と共に提示されていきます。「人」という名詞が主格として提示された場合は、「(歩く,agent_case,人)」というコマンドが完成し、ある3次元オブジェクト空間にイメージが構成されます。そのあと、「(in_case,公園)」という名詞と格が提示されたときには、先ほどの「人が歩く」イメージマップを包むように「公園」という場がマップとして加わって、合成イメージマップが作られます。

そのコマンドの流れの状況がフォーカスで管理され、フォーカスはズームイン・アウト、パン、チルトの操作によって、文脈を作っていくこととなります。

一つの例によって、知識の利用の動きを示します。

(入力文) 私は、昨日地区のお祭りに参加した。秋。実りの秋。地区は長野にある」

(問い) (1) 何が採れたのですか

(2) どれだけの収穫だったのですか

(3) どんなことをやるのですか

(回答の手がかり) (1) に対しては、「長野の一地区の話である」と推測すること。(2) に対しては、「長野の一地区の採れる物といえば、米とリンゴが回答されている可能性がある」ことから、その米とリンゴの収穫量をファクトデータから得られれば良いわけです。(3) に対しては、「お祭りに参加した」ことから、「お祭りの内容」が問われていることを推測します。そのうえで、知識として「獅子舞」とか、「花火」とかの回答をファクトデータから得ます。

回答の手がかりで述べたことは、入力文を解析しながら、登場人物、登場オブジェクト、登場催し、場というものを、相互の関係をもって合成していった、3次元オブジェクト空間を構築して、文脈を得て、フォーカスの当たっている地点を推測していった、回答をファクトデータから得ていくことです。